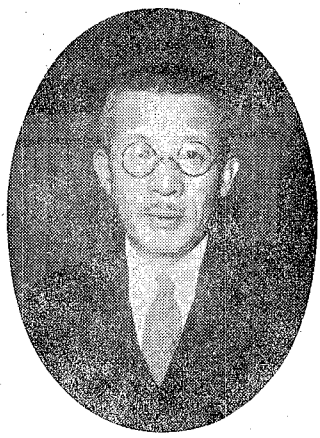
道路改良會首腦部と道路問題の推移

―代議士　田中　好氏―

清水生



山間僻地には傑士が出る

古來から多く山間僻地には傑出したる人物が輩出さるゝと言はれて居るが其の一例として現代議士田中好氏の如きは實如にこれを示すものである。……氏は丹波と云へば山奥と想像されるあの大江山の酒天童子を思ひ出す山國現在は京都府下の船井郡園部村に生れて、船井郡役所の雇として僅かに月俸七圓を頂戴し人生行路の一歩を踏み出してから所謂社會では出世の條件と云はるゝ學閥なく門閥なく閨閥なきに拘らず全く獨力獨歩苦學難行はその識見と力量は漸次頭角を現はして、内務本省に入つては遂に高等官三等にまで昇進し飄然官界を去つては推されて帝國議會に議席を有し國政に參與して堂々たる政治家として雄飛するは畢竟凡庸の士の思もよらざるところである。況んや一

生涯屬僚で汲々として低級なる事務に沒頭する筆更の如きに於てはである。氏に付ては官界を去るまで氏とは十有六年の永き間本省に共に勤務し、或る時は共に談笑し、また或る時は共に食し共に旅する等所謂刎頸の友とも云ふべき現大阪市土木局長である佐藤利恭氏は。

内務省の名物男田中好君が永年の官吏生活を捨てゝ時雨つゞの九月中旬新興會社である東京高速鐵道に入つた世は將に秋である何だか云ひ知れぬ寂しさを感ずる、氏が内務省の名物男であつた、表面的の理由に就ては私は田中君を解說するの必要はない、苟も我邦土木界の總ての人の周知の事實であるから。

と云つて、更に氏の性格に及んで。

情と熱と義の人

氏は克く大勢の人の世話を燒き面倒を見てやつた、恐らく地方の道路主事又は土木主事の全部其他技術者迄も同君の聲の懸かつた者が全國の各地に居るであらう。是等田中君の知遇を受けた人々等は君の去つた事を恰も孤島に取殘された人々の如く言ひ知れぬ淋しさを感じた事であらう。

と氏は情の人でもあつたことを一段と强唱して。

氏の其の部下を愛する事は人一倍であつた、しかもその愛たるや慈母の溺愛に非ずして嚴父の愛であつた、役所でぐず〳〵して居る若者共を手嚴しく酷使した同君は家庭にある時は別人の樣であつた、若い人々と夕餉の膳を共にして一杯飲みながら氣焰の内に若者たちに處世訓を語る君を見る事は屢々あつた、夫れ程に氏は一體人間味の富んだ男であつた。

と述べて、更に氏は熱の人であつたことをかやうに云つてゐる。

田中君は熱の人である、あの繁激な道路課の事務を一人で引受のけて處理した、從つて多少專制君主の非難はあつたけれども君は遂に夫れを爲し遂げた、然し氏の去つた後のことを憂慮する向もあつた位である。私は氏の爲めに將又氏の去つた後の道路課の爲に其の專制的なやり方を改めて道路なり軌道なり夫々の主任者を定めて分擔せしめ各々其の責任に依つて事務を處理するの可なることを忠言した事もあつた、然し田中君は夫れを實行しなかつた事は今にして思へば殘念に思はれるが、是は田中君が餘りにも熱のあり過ぎた逆であらう。

また氏は他面義の人であつたことについて其の一例として。

誰れでも一と通りの義理は盡すものであるがこれは單に表面的のものと精神的のものとの差別はあるが……精神的は犧牲主義から起る從つて永久的である、世の常の人が多く前者に屬する所以は茲にある田中君として今日在らしめたのは君の京都時代の恩師丹羽氏と物故された村川虎雄氏とに負ふ所が尠くない。丹羽氏は田中君の實社會にスタートする時の指導者であつた、

村川氏は田中君を內務省と云ふ檜舞臺に登場せしめた介添役者であつた、從つて義に厚き田中君が此の兩氏に盡すことは甚だ厚いことは實に涙ぐましい位である。……田中君が陰に陽に丹羽氏を援助し庇護して來た事は忘れてはならない、のみならず氏は丹羽氏の上京する度毎に如何に多忙の時であつても一席夕飯を共にし故を溫める事を忘れなかつた。而もそれが二十數年間續いて行はれて居ることは如何に田中君が義に厚いかを窺ふ事の出來る一例であらう。

と云つて居る。

王安石の所謂義熱情の人

執拗にして異を立て剛愎にして自から用ゆ……とは後世の史家が概して王安石に下せる評論である、安石は果して執拗にして異を立てし人物なりしや否やは知らずと雖も、宋史に依つて當時の情勢を推測すると王安石が慨然として變法革俗の議を唱道して一歩も讓らず、富國强兵の政策を實行した跡を顧みる時に、實にその卓拔の識見と邁往の行爲とには感嘆措かざるものがある、この安石は傑出したる人物と凡庸の人間との差を說いて、傑士は義と熱と情に富み、加ふに確乎不動の精神を堅持して勇氣と大膽と高潔とにあると言つてゐるが、過去十有七八年に亙つて氏と親交を結んだ佐藤氏の田中觀に見るも氏の人物は王安石の所謂傑士の條件に克く該當するが如き感を深くするのである。再び佐藤氏の田中觀を引用するやうであるが、田中氏は。

辭つては天下を取つたやうなことを言つてゐるが、其の實常に懷中無一文であつて蓄積しない、いつも妻君が今のまゝで主人が死なば家族は乞食すると云つてゐるが、氏は一向に構はない。喰はず飲まずで俸給を貯金しても天下の金持になる譯ではない、俺が死ぬる時代は家族が喰へなければ國家が扶養する時代になるに違ひないから心配する要はないと言つてゐる。

と述べて居るが、安石の高潔と云ふ言葉……彼の維新大業を完遂した英傑西鄕南洲の「國家に志すものは子孫のために美田を求めず」との言句に克く當て篏まつて田中氏の高潔なるを思はせるものがある。

洮民氏の田中觀と氏の略歷

筆者の敬友平井洮民氏が嘗て「鼎足事務官の後姿」と題して書てあるうちに。

內務省土木局道路課に十數年間名物男として其の名を謳はれて居つた、田中好氏が官界から足を洗つたので其の後はどうなるかとの聲を種々の方面から聞がされ、筆者の屢々耳にする處であつた、或る雜誌には「久しい間の沈滯氣分を破つて涼風茲に至り新進の拔擢を見るに至つた」との一文句を述べて居るが、

まさか田中君が土木局の空氣を沈滯せしめて居つたものとの意ではなからう……明治以來の習慣や舊習に捉はれ前例を尙ぶ仕事振りには、何時も新進を考案し理論に生きる氏としては堪へ難い苦節であつた事を想像し得る。

と云つてゐるのを見ても氏の卓拔な識見と抱負は常にひらめきて空氣の沈滯どころか却つて常に道路課に潑剌たる空氣を注入したかのやうに思はれるのである。茲で筆者は多くの土塊中に只だ一つ燦爛と光る金剛石のやうな氏は、抑々如何なる經歷の持主かと思ふてその略歷を見ると、氏は。

明治十九年十二月三日に周圍山で覆はれてゐる丹波の國、京都府下園部村大字中井に生れて居る、稍々長じて村の小學校に通ひ同三十七年の四月に氏は始めて大枚月俸七圓を頂いて船井郡の郡役所に雇として奉職してゐる、梅檀は双葉より香しいと云はるゝが氏は既にこの頃から鄕土の靑年中に於いても頭角を現はして居たやうであつた。明治四十年一月初めて京都府の屬となつて府の土木課に勤務し主として經理事務に從事してゐたが氏の向上心はかやうのことでは滿足せずして勤務の餘暇固き信念の下に孜々と立命館大學に通ふて法律學科を卒業して居る。當時氏は方向を轉換する積りで辯護士試驗を受くる準備のためであつたと云つてゐるが、京都府廳時代の若き氏は常に朝から深夜に至るまで公務の餘暇さへあれば刻苦勉强に沒頭して居たやうである、當時京都府の至寶と云はるゝ丹羽氏が氏について語つたところを或る雜誌に「何しろ年は若いが朝から晩まで六法全書と頸つ引きで理論家であつた、そして一事件に對しても却々諤々の議論をしたから書類は机上に堆積して居るといふ風であつた、然し仕事をしなかつたのではなく。當時の田中君の頭は勉强で一杯だつたのだらう」と云つて居るのを見ても當時氏は如何に勉學にいそしみたかが窺はれるのである、大正三年十一月に兵庫縣の屬に轉じてからも專ら本省關係の事務と訴訟事務とを擔當してその餘暇には非常の勉學に餘念がなかつたのである。

次田氏は田中氏について語る

而して氏は兵庫縣に在職すること四ヶ年大正七年四月に至つて「事務の都合に依り本職を免す」と云ふ辭令を知事から貰らつて現貴族院議員次田大三郎氏が市町村課長時代に其の英才を認め內務省に入れて、地方局勤務となつたが間もなく土木局道路課の勤務に轉じて、同十一年八月には土木事務官となり高等官七等に叙せられてゐる、大正十二年九月には內閣の臨時震災救護局事務官を仰せ付られ、又同年十二月には鐵道省事務官を兼任して居る、更に翌十三年には高等官六等に昇進して土木試驗所の兼務となり、大正十五年十二月には高等官五等に叙せられ

てゐる。茲に面白いことは氏の履歴中に昭和二年十月三日「昭和二年九月一日發行雜誌道路の改良ノ時論欄ニ於テ乘合自動車ノ主管省ニ就テノ題下ニ不穩當ノ言句ヲ弄シタルハ不謹愼ノ所爲ニシテ職務上ノ義務ニ違背シタルモノトス仍テ文官懲戒令ニ依リ譴責ス」と有難い譴責を受けてゐる、このことに付ては後記するつもりであるが、兎も角氏は文官在職中に譴責を受けたことは事實である。而して皮肉にも同年十一月には勳六等瑞寶章を賜つて居る、更に昭和五年三月には高等官四等に進み、昭和七年二月には勳五等を授けられ同九年五月高等官三等從五位に叙せられてゐる、而して氏は一身上の都合に依つて同九年九月に願ひに依つて本官並に兼官を免ぜられたが退官の際特旨を以て位一級を進められて正五位に叙せられて居る、而して民間に下つた氏は間もなく新興會社である東京高速鐵道に支配人兼庶務課長として實業界に入つたのであつた。

これが大體氏の官界に於ける行路の經緯でもあり、亦略歴とも云ふべきであるが、嘗て筆者は「歴代內務土木局長と其時代」を書べく次田大三郎氏に面會したる際に。

私は土木局のことに付ては最初は道路課長として、次に土木局長として後日內務次官として關係したが、これと云ふ功績もない、唯一つ私は我國の道路の進歩發展のために私の道路課長時代に田中好君を土木局につれて來たことである、氏をつれて來るには行違ひもあり種々苦心し、遂に田中君を土木局に入れたのである、後ちに氏は土木局事務官として高等官三等迄なつて、やめて今は衆議院議員として活動されて居るが、あの道路法制定以來日本の道路の進歩發達と改良されたのは主として田中君の努力に依ると思ふて居る云々。

と次田氏は氏は永年土木局に在つて全く寢食を忘れて專心誠意熱意を持つて道路の改良と發達のために盡瘁したことを詳細に語つたことがあるが「本誌第二十三卷第三號參照」全くその通りであつて、氏の道路課勤務の當時の如きは丁度多年の懸案である道路法案がその年の暮に帝國議會に提出することに決定し、これに引續いて各種の附屬命令等の起案を緊急に要するときであり、又一面に於ては鐵道省主管の地方鐵道法案の議會提出の議があつて、これが實現されれば內務省主管の各種土木行政との折衝及び協調をも法制化するの必要があり、更に道路法と相關聯的にある都市計畫法の制定に對しても協調を保たなければならない實に多忙と頭腦を要する時であつたが、當時の道路課長は最近亡くなられた大日本防空協會の常務理事である故佐上信一氏であり、土木局長は堀田貢氏であつたから明快なる論調と達識を以て着々實行に移したのである氏は當時未だ下級官吏であつたがこの間に處して氏の俊敏なる頭腦と道路問題に關する識見は屢々上司の容るゝところとなり茲に氏の力量も益々發揮せられて土木局に「田中在り」

田中好の仕事

と認めらるゝに至つたのである、某氏は筆者に對して。

田中氏が土木局在任十六年間の永きに亙つて土木行政の進展には最も心血を注いだのであるが、特に道路の發達に渾身の努力を拂つたことは誠に敬服する外はない、恰も其の間氏は終始一貫して土木奉公の誠を致したものである。

と語つたが、其の言葉は簡單ではあるが田中氏の土木局在職中の全部を包含してゐる、又氏は土木局勤務中に於て最も苦心したのは權限問題に關聯する軌道法と自動車交通事業法の制定當時であつたやうである、これは共に運輸營業を主管とする鐵道省と公共土木事業を主管とする內務省とはその立場の相違から猛烈なる論爭が行はれた時であり、又豫算關係に於ては彼の關東の大震災と一般國庫財政との關係から大正十三年度の道路豫算は大削減を受けて當時の土木局長であつた長岡氏は繰延削減居士とまで云はれた時であつた。「本誌二十二卷十號參照」其他氏は道路課在職中に於て道路政策に關したものだけでも一般道路の改良助成政策を始めとして、重要府縣道の自動車道路計畫、指定府縣道に於ける產業開發道路計畫、又は失業救濟國府縣道改良政策、或は產業振興大道路計畫、農村振興道路改良政策等々枚擧に遑ない程ある此の間に處して氏は克く時勢を達觀して內閣の更迭毎に克くその積極消極兩主義を觀察して以て各々夫れに適當するやうに所謂時に應じ機に臨んで着々進捗せしめたことは一事務官の頭腦ではなく既に政治家の素質を多分に持つて居たからである。

田中氏と譴責問題

氏が一般の屬僚的頭腦と變つて居ることは、曩に氏の略歷中に一寸書いた譴責問題でも判るのであつてこれは氏の職務に忠實と信念の現はれであり平凡なる吏員のよく爲す能はざるところである。筆者はこれが動機となつた雜誌道路の改良を讀んで見ると氏の理論整然たるのである。即ち。

近時發達した乘合自動車の營業許可に就ては地方長官の權限に屬する所であつて、之を主管とする主務大臣は世間一般に內務大臣だと思つてゐたが、最近遞信大臣から地方長官に對して一定の路線に依り自動車を以てする運輸營業を許可せむとする時は遞信大臣に稟伺すべき訓令したので、乘合自動車に關する主務大臣は曩年世上の攻擊を受けた軌道の主務省問題と同一の禍を惹起する事に立至つた。

と冒頭して乘合自動車の主管省を明確になし、陸上交通の整備統一を論じて道路を主管するものが乘合自動車を規律するのでなければ道路交通の發展は期せられず、殊にこれに付ては道路法に規定されて居るから、從て乘合自動車に關する權限は內務省に在る所以を縷說して遞信大臣が之に干涉せんとするは違法である、從て地方長官は遞信大臣の發したる違法訓令には服從するの必要が

ないと斷じたのである、嘗て故政友會の總裁であつた法律の大家鈴木喜三郎氏はこの論文は金鵄勳章だと云つたさうだが、王安石の所謂傑出せる人物の條件中に列記してある「大膽と勇氣」の持主云々は田中代議士の性格は克くこれを表現して居ると思はるゝのである。

道路改良會と田中氏

道路改良會は大正七年の八月道路法の實施と共に殆んど期を同じうして、當時の內相床次竹二郎氏前內相現會長水野錬太郎氏や內務次官小橋一太氏並に澁澤子爵內田嘉吉氏等當代一流の名士を網羅して。

邦家の隆運を昌にし公衆の福祉を進むるの途固より一ならずと雖も交通機關を完備する如き蓋し其の最も緊要なるものたるべし、交通機關能く整備して各地の聯絡疏通爲に全きを得むか、農村の開發振興始めて著しきを加へ都市の殷賑繁榮愈々大なるを致し物價の如きも各地を通じて能く平準を保つことを得るに至るべく獨り平時に於て進展に資する所極めて多きのみならず一旦有事の秋に際せば國防上に至大の利便を供與す可きや固より疑を容れず「中略」本邦道路の不備今猶昨の如し是れ或は國土の地形自ら道路の開發を困難ならしめたるが爲なるも封建諸侯が故らに交通の便を避け割據の風を成したる餘弊を承けたるものあるとに因るべしと雖も、鐵道の開通を見るに及んで一時道路の必要閑却せられたるもの亦確に其の一因たらずんばあらず、然れども鐵道と道路とは各其の機能を異にするのみならず鐵道の普及には自ら其の限度あり兩者相俟ちて相互に交通機關の效用を完うせしめざるべからず、殊に近時道路を利用する快速運輸機關の發達普及せむとするに當り交通上に於ける道路の價値愈々顯著なるを致せり、之が改善の一日も曠うすべからざるを復言を俟たざるべし「以下略す」

との趣旨の下に設立されたのであるが、同會が創立以來或は東京市の路面改良計畫を樹立して、其の實行を當局に建議して幾多の迂餘曲折を經て漸く其の目的を達したり又は我國の交通系統の一大幹線である東京神戸間國道改良の調査を實地調査し以て道路改良の急務なることの宣傳に勉め道路改良の機運促進をなしたり、或る時は道路の改良に伴ひ道路工學は他の工學に比較して著しく輕視されて居たる弊を矯むるために、その振興を企圖して各地に講演會を道路關係者のためには講習會を開催し、更に機關雜誌として「道路の改良」を發行して多數理解ある讀者を擁したること等々即ち道路改良會が克く世論を喚起して着々其の效果を上げ使命を達成し今尙達成しつゝあることは田中氏が同會創立の際より幹事の一員に推されて爾來退官に至る迄殆んど氏の隱れたる努力と撓まざる熱心努力の結果に依ると云つても敢へて過言ではない

のである。

田中代議士と語る

筆者はかねてより立法府に於て田中好氏と云へば土木行政通との噂さを聞いて居たがこれまで嘗て一度も面會するの機會がなかつたので何等の機會があれば一度會つて見たいと思ふて居たのであつた。實はその對面して見たい氣持は土木行政と云ふが如き筆者の專門外のことでなく月俸七圓の一山間僻地の小官衙の雇から身を起して道路行政の權威者となり、轉じては鄉土數萬の人々から推されて衆議院議員として席を立法府に置くが如きは決して凡庸の人物の能くなす能はざるところであると思ふたのでこの好奇心が多分に手傳つたからである、幸にして拙稿を書くに當つて古語の「名を聞くは面を見るに若かず面を見るは名を聞くに若かず」とのことを思出し畏友平井君に紹介狀を貰らつて、某日杉並區天沼の氏の邸を訪ふたのである刺を通じて面會を求むると快く早速瀟洒たる客間に案内され床間にかゝつて居る東鄉元帥の筆に成る「有志者事意成也」の掛軸を見て居るうちに田中氏は快活の態度で現はれたので野人の筆者は簡單に初對面の挨拶を了へてから種々雜談に移つたが、其の内に。

僕の土木局に居つた頃は皆な大いにはり切つて居つた、今は亡くなられた堀田サンは實に偉らかつたよ、全く普通の局長とは違つて居つた……あの道路法を作る時に道路を國營造物説と市町村の自治體營造物との意見に分れて居つたが、次田サンが道路課長であつたが、法理論から割出して正論を吐いたものじや。佐上サンがこれを繼承して國の營造物でやつたのである。

と回顧談をせられ次いで。

次田サンが地方局長の際は例の經濟界の不況に基因して多數の失業者が簇出した時であつたが、佐竹三吾氏が交通日本と云ふ雜誌を發行して居たので、氏から僕は何か論文を書いてくれと頼まれて僕は當時全國に漲る多數失業者救濟の急務を力説して現民政黨内閣には其の對策なしと論じたのであつたが、これが政務次官會議で問題になつて田中事務官を罷免せよとの説が多數であつたが齋藤隆夫氏や一宮房次郎氏が反對したやうであつた。安達内相は政治家でもない政府の一役人が政府にパンを與へて貰らつて居るに拘らず現内閣に反對するとはけしからぬとて非常に怒つて一札詫狀を取られたことがあるよ。

と氏は茲で筆者と共に呵呵大笑して。

夫れから益々失業者が增加する一方であり政府の無策を攻擊する聲が段々强くなつて來た爲めか三ヶ月程經て突然次田局長が僕に來てくれと云ふので來つて見たら失業者は益々增加の一方を辿りこれでは治安の維持を保つに困難で延いて内閣の重大問題にも影響するからとて救濟事業の話しであつたので若し道路

事業を全國的にやつたならば一年位仕事が出來るか凡そどれだけの金が散布出來るかと種々意見を聽取されたので、僕は失業救濟對策の一つとして失業救濟道路改良計畫を考へて居たので早速技師連と相談して一ヶ年六千萬圓を使へる丈けの仕事が出來ると云つたら、次田氏はタツタ六千萬圓かと云つて直接大臣と打合して早速即ち豫算が成立したのであつた。

と語つて今度は話は道路改良會に移つて、

一體あの會の出來た動機はサミユールヒルを澁澤子爵が招待したのが動機となつてゐるが、當時の内相床次氏や前内相の水野氏や其他當時知名の士が發起人となつて道路改良の促進を圖ることを使命として創立したものじやが、却々活動したものじや然し某氏が居つて仕事しやうとしても金を出さない、又仕事をせないと世間から無能視さるゝので僕は一厘も道路改良會には迷惑もかけずして、當時大阪知事であつた縣忍氏と關市長に說いて大阪に全國道路關係者の大會を開くからとて各々一萬圓宛の寄附を依賴したところ洗石が大阪とて即座に引受けてくれたのでその準備にとりかゝり、全國から道路關係者が千五百餘名程集まつて却々盛會で公會堂は全く立錐の餘地なかつた程であつた。而して技術事務兩方面の人々から夫々將來に於ける參考のために研究や種々の報告を徵したのであつた、この時は實に愉快でもあり有益な大會でもあつた。

茲で氏と筆者の雜談は轉じて、本州と九州を國道に依つて直通連絡する國防上將又產業上極めて重要な使命を有し苟もこれが實施は多年の懸案であつた關門隧道の話に及んで、氏は。

あの關門隧道は是非共一度は見て置いて貰らひたい。

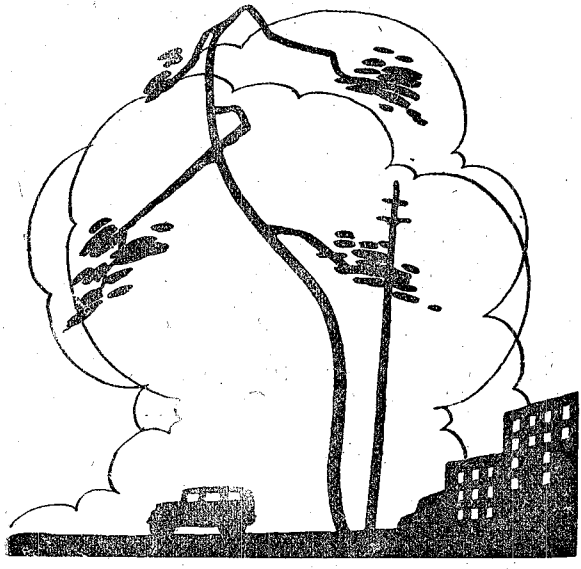
と冒頭して。

僕は丹羽局長と九州地方へ旅行し歸つてから下關門司間に一大橋を架設することに付いて技師に相談をして出來た計畫をあの地は要塞地帶であるから當時參謀本部の第三部長であつた後ちの牛島大將を訪問して夫れを說明して意見を求めたら一度戰爭でも勃發すれば空襲を受ける危險が多分にあるから夫れはいかんとのことであつたので隧道案に代つたのである云々。

と、關門隧道については〇〇の關係上これ以上は省略することにしたが、氏と筆者との快談は前記した外に戰局の進展や時局問題、超非常時對策其他次から〳〵へと、初對面にも拘らず終るところを知らず思はず時の移るを忘れた位實に愉快の半日を氏の宅で過ごしたが辭するに際して玄關まで送られて、心密かに非禮であつたのを感じ亦一面永年の知己の如く誠に氏に對して懷しみを覺ゆるのであつた。

立法府に其人在り

由來讀書の士健筆の士雄辯の士は、必ずしも實行の人に非ず實

行の人往々にして讀書の用を知らず、是れ古今完人の鮮き所以なりとは木戸松菊の言葉であるが、氏は其の學歴の示すが如く國家最高の學府たる所謂帝大出ではないかその讀書力に於ては政治財政經濟は勿論土木行政土木技術の諸學を渉獵して氏の健筆は高等土木工學自治研究叢書其他の著書となつて現はれ、亦幾多の雜誌に投稿してゐるが殊に我が「道路の改良」についても氏は道路改良會に關與時代に内務事務官の多忙の身を以て路政僧丹波人、一記者等々の名の下に毎號雄筆を揮つて路政界を指導し啓發したるを見ても以て氏は如何に堂々たる論評家たると共に文章家であることが窺はれるのである、若し夫れ其の實行力と計畫力に至つては其の一端ではあるが前記した氏が勤務中に立案した道路政策の現はれに依つても亦推知することは難くないのである、亦一面非常の熱心と努力家であることは公務が土木事務官と鐵道事務官の二職を持つて居たに拘らず、道路改良會や日本大學高工講師、日大工學部教授を引授け、更に各誌に執筆を爲し實に寸閑も尙ほ努力して居たことでも判明するのである、恰も其の性格は磊落にして識見非凡にして克く大處高處から其のものを達觀すると同時に明晰の頭腦は細事も忽かせにせず、所謂明達の士であると筆者は思つたのであつた、惟ふに現在の世界は有史以來空前ともいふべき大戰と激動の眞最中であつて從て現在の一日一ヶ月は過去に於ける歴史の十年或は一世紀にも匹敵する變轉期である、されば此の重大時局に對しては益々軍事に政治に財政經濟に技術に其他凡ゆる要素を結集を必要とするに際して、氏の如き識見卓拔の士が戰時立法府に居ることは吾人の意を最も強くするところであるを確信して禿筆を擱くことにする。

「全文筆責在記者」